

青ひげ

ペロー著 楠山正雄訳

一

むかしむかし、町と田舎に、大きな屋敷をかまえて、金の盆ぼんと銀のお皿さらをもつて、きれいなお飾りとぬいはくのある、椅子、机と、それに、総金ぬりの馬車までも持っている男がありました。こんな幸せな身分でしたけれど、ただ一つ、運の悪いことは、おそろしい青ひげをはやしていることで、それはどこの奥さんでも、娘さんでも、この男の顔を見て、あつと言って、逃げ出さないものはありませんでした。

さて、この男の屋敷近くに、身分のいい奥さんがあつて、二人、美しい娘さんをもっていました。この男は、この娘さんのうちどちらでもいいから、一人、お嫁さんにもraitたいと言って、度々、この奥さんをせめました。けれど、二人が二人とも、娘たちは、この男を、それはそれは嫌っていて、逃げまわつてばかりいました。なにしろ青ひげをはやした男なんか、考えただけでも、ぞつとするくらいですし、それに、胸の悪いほど嫌なことには、この男は、前からも、いく人か奥様をもつていて、しかもそれが一人残らず、どこへどう行つてしまったか、ゆくえが分からなくなっていることでした。

そこで、青ひげは、これは、この娘さん親子のご機嫌をとつて、自分を好きになるようにしむけることが、何より近道だと考えました。そこで、ある時、親子と、そのほか近所で知り合いの若い人たちを大勢、田舎の屋敷に招いて、一週間あまりも泊めて、ありつたけのもてなしぶりを見せました。

それは、毎日、毎日、野遊びに出る、狩りに行く、釣りをする、ダンスの会だの、夜会だの、お茶の会だのと、目のまわるようなせわしさでした。夜になつても、たれも寝どこに入ろうとするものもありません。宵がすぎても、夜中がすぎても、みんなそこでもここでも、おしゃべりをして、笑いさざめいて、ふざけっこしたり、歌を歌いあつたり、それはそれは、賑やかなことでした。とうとうこんなことで、何もかも、とんとん拍子にうまく運んで、末の妹のほうがまず、この屋敷の主人のひげを、もうそんなに青くは思わないようになり、おまけに、りっぱな、礼儀ただし紳士だとまで思うようになりました。

さて、うちへ帰ると間もなく、ご婚礼の式がすみました。

それから、ひと月ばかりたった後のことでした。

青ひげは、ある日、奥がたにむかつて、これから、ある大切な用向きで、どうしても六週間、田舎へ旅をしてこなければならぬ。その代わり、留守の間の気ばらしに、お友達や知り合いの人達を、屋敷に呼んで、里の家にいたじぶんと同じように、面白おかしく遊んで、暮らしても構わないから、と言いました。「さて、」と、その後で、青ひげは奥がたに言いました。「これは二つとも、私の一番大事な道具の入っている大戸棚の鍵だ。これは普段使わない金銀の皿を入れた戸棚の鍵だ。これは金貨と銀貨をいっぱい入れた金庫の鍵だ。これは宝石箱の鍵だ。これは部屋残らずの合鍵だ。さて、ここにもう一つ、小さな鍵があるが、これは地下室の大廊下の、一番奥にある、小部屋を開ける鍵だ。戸棚という戸棚、部屋という部屋は、どれを開けてみることも、中に入ってみることも、おまえの勝手だが、ただ一つ、この小部屋だけは、決して開けてみることも、まして、入ってみることはならないぞ。これはかたく止めておく。万一にもそれに背けば、俺は怒つて、何をするか分からないぞ。」

奥がたは、お言い付けのとおり、必ず守りますと、約束しました。やがて青ひげは、奥がたにやさし

く接吻して、四輪馬車に乗って、旅立って行きました。

二

すると、奥方の知り合いや、お友達は、お使を待つ間も、もどかしがって、我先に集まって来ました。お嫁入り先の、立派な住まいの様子が、どんなだか、どのくらい、みんなは見ただけでいいでしょう。ただ主人がうちにいる時は、例の青ひげがこわくて、誰も寄り付けなかったのでございます。

みんなは、居間、客間、大広間から、小部屋、衣裳部屋と、片っぱしから見歩きましたが、いよいよ奥深く見て行くほど、だんだん立派にも、綺麗にもなっていくようでした。

とうとうおしまいに、いっぱい家具のつまった、大きな部屋に来ました。そのなかの道具や置物は、この屋敷のうちでも、一等立派な物でした。壁掛けでも、寝台でも、長椅子でも、箆筒でも、机や、椅子でも、頭のとっぺんから、足の爪さきまでうつる姿見でも、それはむやみにたくさんあって、むやみにびかびか光って、綺麗なので、誰も彼も、ただもう、感心して、ふうと、ため息をつくだけでした。姿見のなかには、水晶の淵のついた物もありました。金銀メッキの淵のついた物もありました。何もかも、この上もなくけっこうずくめな物ばかりでした。

お客たちは、まさかこれほどまでも思わなかった、お友達の運の良さに、今さら感心したり、うらやましがったり、いつまでもはてしがありませんでしたが、ご主人の奥がたは、いくら立派なお部屋や、飾り付けを見て歩いても、じれったいばかりで、一向に面白くも楽しくもありませんでした。それというのが、夫が出がけに厳しく言い付けて置いていった、地下室の秘密の小部屋というのが、始終、どうも気になって気になって、ならないからでございます。

いけないというものは、とかく見たいのが、人間のくせですから、そのうちいよいよ、我慢がしきれなくなってくると、この奥がたは、もうお客に対して、失礼のなんのということを、思っではいられなくなつて、一人そと裏ばしごを降りて、二度も三度も、首の骨が折れたかと思うほど、激しく、柱や梁にぶつかりながら、夢中でかけ出して行きました。

でも、いよいよ小部屋の戸の前に立つてみると、さすがに夫の厳しい言い付けを、はっと思ひ出ししました。それに背いたら、どんな不幸せな目にあうかしない、そう思って、しばらくためりました。でも、誘いの手が、ぐんぐん強くひっぱるので、それを払いきることは、できませんでした。そこで、小さい鍵を手にとって、ぶるぶる、震えながら、小部屋の戸を開けました。

窓が閉まっているので、始めは何にも見えませんでした。そのうち、だんだん、暗闇に目が慣れてくると、どうでしょう、その床の上には、いっぱい血の塊がこびりついていて、五六人の女の死がいや、ならべて壁に立てかけたのが、血の上にうつって見えていました。これは、みんな青ひげが、一人一人、結婚した後で殺してしまった女たちの死がいでした。これを見たたん、奥がたは、あつと言ったなり、息が止まって、体がすくんで動けなくなりました。そうして、戸の鍵穴から抜いて、手に持っていた鍵が、いつか、すべり落ちたのも知らずにいたくらいです。

しばらくして、やっと我にかえると、奥がたは慌てて、鍵を拾いあげて、戸を閉めて、急いで二階の居間に駆けて帰ると、ほっと息をつきました。でも、いつまでも胸がわくわくして、正気がつかないようでした。

見ると、鍵に血がついているので、二三度、それを拭いてとろうとしましたが、どうしても血がとれません。水につけて洗ってみても、石鹸と磨き砂をつけて、砥石で、ごしごし、こすってみても、いっこうにしるしがみえません。血のついた跡は、いよいよ、濃くなるばかりでした。それもそのはず、この鍵は魔法の鍵だったので。ですから、表側の方の血を落したかと思うと、それは裏側に、いつか、余計濃く、にじみ出していました。

すると、その日の夕方、青ひげが、ひょっこり、うちへ帰って来ました。それは、まだ向こうまで行かないうち、途中で、用向きが、都合よく片づいた、という知らせを聞いたからだ、と、青ひげは話しました。だしぬけに帰って来られた時、奥がたは、ぎょつとしましたが、一生懸命、うれしそうな顔をして見せていました。

さて、そのあくる朝、青ひげは、さっそく、奥がたに、預けた鍵をお出しと言いました。そう言われて、奥がたが鍵を出したとき、その手の震えようといったらありませんでしたから、青ひげは、すぐと勘づいてしまいました。

「おや。」と、青ひげはいいました。「小部屋の鍵が一つ無いぞ。」

「じゃあ、きつと、あちらの机の上に置き忘れたのでしょうか。」と、奥がたは答えました。

「すぐ持ってこい。」と、青ひげは、怒った声を出しました。

五六度、あちらへ行ったり、こちらへ行ったり、まごまごした後で、奥がたは、しぶしぶ鍵を出しました。青ひげは、鍵を受けると、こわい目をして、じつと眺めていましたが、

「この鍵の血はどうしたのだ。」と言いました。

「知りません。」と、泣くような声で答えた奥がたの顔は、死人よりも青ざめていました。

「なに、知りませんか。」と、青ひげは言いました。「俺はよく知っているよ。お前はよく思いきつて、小部屋の中に入ったな。えらい度胸だ。よし、そんなに入りたければ、あそこへ入れ、入って、そこにいる奥さんたちの仲間になれ。」

こう言われると、奥がたは、いきなり夫の足元につぶして、いかにも真心から、悔い改めた様子で、もう決して、お言い付けには背きませんから、といって、侘びました。この上もなく美しい人の、この上もなく悲しい姿を見ては、岩でもとろけ出したでしょう。けれど、この青ひげの心は、岩よりも、金よりも、かたかったのでございます。

「奥さん、あなたは死ななければならぬ。今すぐに。」と、青ひげは言いました。

「わたくし、どうしても死ななければならぬの。」と、奥がたは答えて、目にいっぱい涙を浮かべて、夫の顔を見ました。「せめてしばらく、お祈りをする間だけ、待ってくださいまし。」

「仕方がない、七分半だけ待つてやる。だがそれから、一秒も遅れることはならないぞ。」と、青ひげはいいました。

一人になると、奥がたは、女の姉妹の名を呼びました。

「アンヌ姉様、アンヌ姉様、後生です、塔のてっぺんまで上がって、兄様たちが、まだおいでにならないか見てください。兄様たちは、今日、訪ねて下さる約束になっているのです。見えたら、大急ぎで来るように、合図をしてください。」

アンヌ姉様は、すぐ塔のてっぺんまで上がって行きました。半分きちがいのようなになった奥がたは、かわいそうに、始終、叫び続けていました。

「アンヌ姉様、アンヌ姉様、まだ何も来ないの。」

すると、アンヌ姉様は言いました。

「日が照って、埃が立っているだけです。草が青く光っているだけです。」

そのうちに青ひげが、大きな剣を抜いて手に持って、ありったけのわれがね声を出して、どなりたてました。

「すぐ降りてこい。降りてこないと、俺のほうから上がって行くぞ。」

「もうちょっと待つてください、後生ですから。」と、奥がたは言いました。そうして、ごく低い声で、

「アンヌ姉様、アンヌ姉様、まだ何も見えないの。」と、叫びました。
アンヌ姉様は答えました。

「日が照って、埃が立っているだけです。草が青く光っているだけです。」

「早く降りてこい。」と、青ひげは叫びました。「降りてこないと、上がって行くぞ。」

「今まいります。」と、奥がたは答えました。

そうして、その後で、「アンヌ姉様、まだ何も見えないの。」と、叫びました。

「ああ。でも、大きな砂けむりが、こちらの方に向かって、立っていますよ。」と、アンヌ姉様は答えました。

「それはきっと、兄様達でしょう。」

「おやおや、そうではない。羊の群れですよ。」

「こら、降りて来ないか、貴様。」と、青ひげは叫びました。

「今すぐに。」と、奥がたは言いました。そうして、その後で、「アンヌ姉様、アンヌ姉様、まだ、誰も来なくて。」

「ああ、二人馬に乗った人がやってくるわ。けれど、まだずいぶん遠いのよ。」

「ああ、ありがたい。」と、奥がたは、うれしそうに言いました。「それこそ、兄様達ですよ。私、兄様達に、急いで来るように合図しましょう。」

その時、青ひげは、家ごと震えるほどの大声で怒鳴りました。奥がたは、しおしお、下へ降りて行きました。涙をいっぱい目にためて、髪の毛を肩にたらし、夫の足もとにつつぶしました。

「今さらどうなるものか。」と、青ひげはあざ笑いました。「はやく死ね。」

こう言って、片手に、奥がたの髪の毛をつかみながら、片手で、剣を振りあげて、首をはねようとしてました。奥がたは、夫の方を振り向いて、今にもたえ入りそうな目つきで、ほんのしばらく、身づくろいする間、待つて下さいと、頼みました。

青ひげはこう言って、剣を振りあげました。

「ならん、ならん。神様にまかせてしまえ。」

そのとたん、表の戸に、ドンと、激しくぶつかる音がしたので、青ひげは思わず、ぎょっとして手を止めました。とたんに、戸が開いたと思うと、すぐ騎兵が二人入って来て、いきなり、青ひげに向かって来ました。これは奥がたの兄弟で、一人は竜騎兵、一人は近衛騎兵だということを、青ひげはすぐと知りました。そこで、慌てて逃げ出そうとしましたが、兄弟はもう、後ろから追いついて、青ひげが、くつぬぎの石に足をかけようとするところを、胴中を一突き突き刺して、殺してしまいました。

でもその時には、もう奥がたも気が遠くなって、死んだようになっていましたから、とても立ちあがって、兄弟たちを迎える気力はありませんでした。

さて、青ひげには、後継ぎの子がありませんでしたから、その財産は残らず、奥がたのものになりました。奥がたはそれを、姉様や兄様たちに分けてあげました。

もの珍しがり、それはいつでも心をひく、軽い楽しみです。一度、それが満たされると、もうすぐ後悔が代ってやってきて、そのため高い代価だいかを払わなくてはなりません。

底本：「世界おとぎ文庫（イギリス・フランス童話篇）妖女のおくりもの」小峰書店

1950（昭和25）年5月1日発行